

カトリックさいたま教区サポートセンター ボランティア活動報告

第10チーム・2011年6月2日(木)～7日(火)

■ 仙台教区・塩釜ベース (宮城県塩釜市) (シスター1人、信徒女性1人、男性2人、計4名)

今回のチームは宮城県塩釜ベースで活動した。話に聞いてはいたが、やはりハードな力仕事が多かった。

仙台教区のベースでの活動は、地元の社会福祉協議会から委託される仕事を中心。今回は朝早く桂島に船で向い、そこで未だヘドロにまみれている地域の瓦礫撤去、住宅の泥かきと掃除の作業を行った。一日に3回マスクを替えなければならないほどの粉塵だった。半袖では朝晩はまだ寒い、雨具を着ると非常に暑いので、長袖の服を持っていくと便利だと思った。

基本的にベースの責任者の指示のもとで動き、用意されたプログラムに沿って行動をした。一日に数本しかない船の移動なので時間厳守！以下に塩釜ベースでの時間割[6月初旬時点]を載せるので参考にしてほしい。

様々な地域からのボランティアとの出会いが大変新鮮だった。

塩釜ベース時間割

- 7:00 起床
- 7:30 朝食(朝食後に出発前ミーティング)
- 8:30 VC(ボランティアセンター)へ出発
- 16:00頃 帰宅(夕食まで自由時間)
- 18:00 夕食
- 19:30 ミーティング
- 22:00 消灯



桂島の地図



ヘルメットをかぶりながらの作業

■ ボランティア派遣窓口からのお知らせ ■

6月に入って、今回のこの派遣チームから「木曜日出発～火曜日帰宅」の日程を組んでいます。

■ 湯本サポートステーション (福島県いわき市) (シスター2人、信徒男性2人、計4名)

5月中旬より仙台教区の氏家仁神父(いわき教会協力司祭)が湯本教会に常駐するようになってから、信徒や地元の方々との連携が綿密になってきたように感じる。

活動内容は、基本的に傾聴ボランティアが中心だが、現場でのニーズ調査によっては物資を調達して届けたりする仕事もある。または社会福祉協議会に赴いて仮設住宅への引越の手伝いや掃除、瓦礫撤去の作業をすることもできる。7、8か所の避難所を訪れたが、ほとんどの被災者が仮設住宅に引越をする段階にあった。現地滞在中に訪れた3つの避難所が閉鎖され、統合されたようだ。

カトリックいわき教会で、湯本ステーションといわきの傾聴ボランティアグループ「みみ」との初めての会議が開かれた。そこでこれからどのような協働をしていくかが話し合われた。

今回初めて土日をはさんだ派遣日程で、週末に避難所を訪れたときは、週日は仕事や学校でいない働きざかりの人たちや子どもたちも含め、多くの人々がいらした。しかし週末はイベントも多々あり、家族の団らんの場となっていたので傾聴するには躊躇した。それでも、「避難所に洗濯機がない」、「仮設住宅に住む高齢者にとっては、新しい家電製品は扱いにくい」などの声を聞いて、地元の方々と一緒に支援対策を練ることができた。

今週6月11日(土)には、いわき市の2か所でさいたま教区の館林教会とブラジル人グループが炊き出しを行う予定だ。



傾聴グループ「みみ」との会議



湯本教会の主日のミサの様子
聖堂が倒壊寸前なので、現在ステーションとなっている司祭館で行う

■ 仙台教区・塩釜ベース（宮城県塩釜市）

（信徒女性2名、信徒男性1名、計3名）

主な仕事は、家の中のヘドロを掻き出す仕事だった。津波によって運ばれてきたドロや砂には、何が混ざっているかわからない。肌に触れて、強い痛みを伴いながら赤く爛れた人もいたらしい。

そこで、嚴重装備をしなければならない。雨具を着る訳だが、その時期は雨具を着ただけで蒸し風呂状態になるので、その下に長袖を着用する。目に入ると大変なことになるのでしっかりとゴーグルでカバーする。口にはマスク。当然防塵マスクを使用する。長靴の中には、中敷をしてガラスや釘などを防がなければならない。

このくらいの重装備だと身の安全は守られる。が、問題は重装備ゆえの異常なまでの暑さだ。蒸し風呂状態になったままの長時間作業はつらい。足にも腰にもかなりきた。1日の作業を終えるとぐったり。一ところが、掻き出されて積まれたヘドロや瓦礫の山を見ると喜びが湧きでてくるのだ。今日の成果を見て思わずニンマリ。こうして過ごした4日間だった。

■ 湯本サポートステーション（福島県いわき市）

（助祭2名、シスター1名、信徒女性1名、引退牧師1名、計5名）

避難所からどんどん人の姿が消えている。いわき市では今なお避難所に留まっている人の数は合計300人足らずという報告がある。仮設住宅の建設も進んでいて500戸余りが完成している（6月15日現在）が、私たちが訪問した高久の仮設住宅の入居者は3分の1程度だった。仮設住宅への移住が新たな問題を生んでいることも知った。ある避難所は、津波の被害地ではなく、放射能の影響が大きいと思われる地域からの避難者が多かったが、その中で、本来の居住区域ごとに仮設に入れる優先順位が決まっているのだという。その順位の決め方にも納得がいけないという人がいた。自分の家族には高校受験の子どもがいる。なんとか静かに勉強できる環境を与えてやりたいが、地域の優先順位が低いためにそれが出来ない。市内に空きアパートはたくさんある。しかし、たい

てい県や市が雇用促進事業で借り上げていて、入居できない。「今は食べるには困らない。住むところが最大の問題だ」と彼は話してくれた。

被災者の状況が刻々変わっているのだから、支援の形も変えざるを得ない。今まで通りの炊き出しでよいのか？ 欲しいといわれた物品をとどければよいのか？ 仮設に移ったことで却って孤独にさいなまれる人もいるという。そういう人たちをきめ細かく見出し、支えていくには何が必要か？ どんな手段があるのか？

支援したいと思う人は、ますます頭を使い、智恵を働かせて被災者に奉仕しなければならなくなった。助けてあげる、手を伸ばしてあげる、という意識をすてて、彼らに寄り合い、共に生きるという思いで今後の活動を構築していこう。

第12チーム・2011年6月16日(木)～21日(火)

■ 仙台教区・塩釜ベース（宮城県塩釜市）

（信徒女性2名、信徒男性2名、計4名）

報告は、また次回！

■ 湯本サポートステーション（福島県いわき市）

（シスター1名、信徒女性1名、信徒男性2名、計4名）

この期間は、湯本チームには珍しく傾聴の仕事はほとんどなかった。主に、湯本に運び込まれた多大な量の物資の山を品物の種類ごとに仕分けをする仕事だった。バザーで集められた物資だったようで、箱には「皿」と書かれてあるのに中身は別物であったり、冬物ばかりが詰められたダンボール箱があったり…と、これでは必要な時に肝心なものがどこにあるのかわからない。仕分けをすることもボランティア活動の重要な仕事のひとつなのだと認識させられた。

もうひとつは、体育館に避難している方々へ、味噌汁と一菜を作り届ける仕事だ。少し前から、傾聴ボランティアグループ「みみ」のメンバーたちが昼食を運んでいる。その「みみ」から「夕食を湯本教会から届けてくださるようお願いしたい」とのオファーを受けたのだ。味噌汁を渡ししながら、話しかける。話が弾む。傾聴が始まる。傾聴するにも、いろいろな方法があるのだと、良い気付きを頂いた体験だった。